

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | |
|---------------|----------|--|--|--|------------------------|---|--|---|---|---|---|--|------------------------------|------------------|-------------------------|
| | | | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ | | | | 症状の悪化 につながるおそれ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | | 適量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ |
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | 用法用量 | 効能効果 |
| 抗炎症成分 | 酢酸プレドニゾン | プレドナマ注腸20mg(酢酸プレドニゾンがないためリン酸プレドニゾンで代用) | ラットの腹膜内酢酸注入潰瘍性大腸炎モデルに対し、リン酸プレドニゾン0.3mg/kg、0.1mg/kgの注腸投与にて有意な潰瘍面の縮小効果が認められた | ハルピツール酸誘導体(フェノバルビタール)・フェニトイン・リファンピシン(本剤の作用が减弱)、サリチル酸誘導体(併用時に本剤を減量すると、血清中のサリチル酸誘導体の濃度が増加し、サリチル酸中毒)、抗凝血剤(抗凝血剤の作用を减弱)、経口糖尿病用剤・インスリン製剤(これらの薬剤の作用を减弱)、利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く)(併用により、低カリウム血症)、活性型ビタミンD3製剤(高カルシウム血症、尿路結石があらわれる)、シクロスポリン(副腎皮質ホルモン剤の大量投与により、併用したシクロスポリンの血中濃度が上昇)、マクロライド系抗生物質(副腎皮質ホルモン剤で、作用が増強) | アナフィラキシー様反応、喘息発作(頻度不明) | 頻度不明(月経異常、下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進、多幸症、不眠、頭痛、めまい、筋肉痛、関節痛、満月様顔貌、野牛肩、望業負平衡、脂肪肝、浮腫、血圧上昇、低カリウム性アルカローシス、網膜障害、眼球突出、白血球増多、ざ瘡、多毛、脱毛、色素沈着、皮下出血、紫斑、線条、そう痒、発汗異常、顔面紅斑、劇癢治癒障害、皮膚菲薄化、脂肪織炎、発熱、疲労感、ステロイド腎症、体重増加、精子数及びその運動性の増減、尿路結石)、高齢者長期投与時に感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後のう白内障、小児:免疫抑制、頭蓋内圧亢進状態や高血圧性脳症。神経障害・抗体反応の欠如(副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種した場合)。 | 禁忌:本剤の成分に対し過敏症の既往歴 原則禁忌 1.有効な抗菌剤の存在しない感染症、全身的真菌症(感染症が増悪するおそれ) 2.消化性潰瘍(消化性潰瘍が増悪するおそれ) 3.精神病(精神病が増悪するおそれ) 4.結核性疾患(結核性疾患が増悪するおそれ) 5.単純疱疹性角膜炎(単純疱疹性角膜炎が増悪するおそれ) 6.後囊白内障(後囊白内障が増悪するおそれ) 7.緑内障(緑内障が増悪するおそれ) 8.高血圧症(高血圧症が増悪するおそれ) 9.電解質異常(電解質異常が増悪するおそれ) 10.血栓症(血栓症が増悪するおそれ) 11.最近行った内臓の手術創(創傷治癒を遅延するおそれ) 12.急性心筋梗塞(心破裂) | 感染症、糖尿病、骨粗鬆症、腎不全、甲状腺機能低下、肝硬変、脂肪肝、脂肪塞栓症、重症筋無力症、高齢者、薬物、食物、添加物等に過敏な喘息患者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦 | 水痘又は麻疹の既往のない患者においては、水痘又は麻疹への感染を強力防くよう常に十分な配慮と観察を行うこと。 | 適用後、投与を急に中止した場合:ときに発熱、頭痛、食欲不振、脱力感、筋肉痛、関節痛、ショック等の離脱症状。 | 高齢者に長期投与した場合:感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後囊白内障、緑内障等の副作用があらわれやすい。 | 通常、成人は、1回量リン酸プレドニゾンナトリウムとして22mg(リン酸プレドニゾンとして20mg)を注腸投与(直腸内注入)する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 潰瘍性大腸炎、限局性腸炎 | | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 副作用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
|---------------|-------------|--------|---|------|--------------|------------------|---|------------------|-----------|---------------------------------------|--|------------------------|--|-----------------|---|--|------|---|---|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | | |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 鎮痛成分 | 塩酸ソフェンヒドラミン | ベナ錠 | 抗ヒスタミン作用。H1受容体に対しヒスタミンと競合的に拮抗することにより作用をあらわす。ヒスタミン遊離抑制作用。 | | | | 頻度不明(口渇、悪心・嘔吐、下痢、めまい、倦怠感、神経過敏、頭痛、眼気) 自動車の運転等危険を伴う機種の操作 | 頻度不明(過敏症) | | 緑内障(悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(悪化) | 授乳中の婦人、未熟児、新生児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、高齢者 | | | | | | | 塩酸ソフェンヒドラミンとして、通常成人1回30～50mg(3～5錠)を1日2～3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 痔瘻、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎)、枯草熱、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、急性鼻炎、春季カタルに伴うそう痒 |
| 鎮痒成分 | クロタミトン | オイラックス | 本剤は抗ヒスタミン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚のうちそう痒感を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことなどから、抗ヒスタミン剤、局所麻酔剤とは作用機序を異にすると考えられる。一般には、皮膚に軽いしゃく熱感を与え、温感に対するこの刺激が競合的にそう痒感を消失させるといわれている。 | | | | 0.1～5%未満(熱感・しゃく熱感、刺激症状(ピリピリ感、ひりひり感等)、発赤、発赤増強・紅斑増悪、分泌物増加、浸潤傾向) | 5%以上(過敏症) | | 本剤に対して過敏症の既往歴 | 高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人への大量又は長期にわたる広範囲の使用、乳幼児・小児に対する広範囲の使用 | | 炎症症状が強い潰出性の皮膚炎:適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。 | | 眼あるいは眼周囲及び粘膜には使用しない。 ・塗布直後、軽い熱感を生じることがあるが、通常短時間のうちに消失する。 | 高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、大量・長期にわたる広範囲の作用は避ける | | 通常、症状により適量を1日数回患部に塗布又は塗擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人、大量かつ広範囲の使用は避ける。 | 湿疹、痔瘻、神経皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
|---------------|------------------|---------------|----------|------------------------------|--|---------------------------|-------------------------|--|------------------|---------------------------------------|---|---|---------------|-------------------------------------|---------------|--------------|--------------------|------|--|--|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量(上限があるもの) | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| | d-マレイン酸クロルフェニラミン | ホウラミン錠 2mg | 抗ヒスタミン作用 | | 中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇) | 痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明) | ショック(頻度不明) | 5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眠気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・ALPの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機械の操作 | | | 本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ) | 眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人 | | | | | | | d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。 |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 盗用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | | |
|---------------|---------------|---|--|---|-----------------------------------|--|---------------------------------|---|--|--|--|---|--|--|------------------------|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるおそれ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | 用法用量 | 効能効果 | | |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | 使用量に上 限があるもの | 適量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | | |
| 止血成分 | 塩酸テトラヒドロソリン | ABCスプレ 点鼻薬、塩 酸塩がなく、 硝酸塩 | 直接局所粘 膜に適用す れば粘膜の 充血、腫脹を 除去する。 血圧上昇作 用はエビネフ リンと類似で あり、作用の 発現はエビネ フリンより遅 い。 | モノアミン酸化 酵素阻害剤 (急激な血圧 上昇) | | 頻度不明(傾 眠、頭痛、め まい、振戦、 不眠症、脱力 感、血圧上 昇、心悸亢 進、不整脈、 熱感、刺激 痛、乾燥感、 反応性充血、 鼻漏、長期使 用で反応性の 低下等) | 頻度不明(過 敏症) | | ・本剤に対し過敏 症の既往歴 ・2歳未満の幼児 ・乳児(全身症状) ・モノアミン酸化酵 素阻害剤を投与中 (急激な血圧上昇) | 冠動脈疾患、高血 圧症、甲状腺機能 亢進症、糖尿病、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、小児 | 適用又は頻回 使用により反 応性の低下 や局所粘膜 の二次充 血を起こすこ とあるので、 急性充血期 に限って使 用するか又は 適切な休薬 期間において 使用すること。 | 適用又は頻回 使用により反 応性の低下 や局所粘膜 の二次充 血を起こすこ とがある。 小児において、 過量投与により、 発汗、徐脈、昏 睡等の全身症状 があらわれやす い。 眼科用として使 用しないこと。 | 適用又は頻回 使用により反 応性の低下 や局所粘膜 の二次充 血を起こすこ とがある。 | 本剤は原則として6歳以 上の小児及び成人に用い る。 通常、成人3～5時間毎に2 ～3回鼻腔内に噴霧する か、又は2～4滴を鼻腔内 に点鼻する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 | 上気道の諸疾 患の充血・うっ 血 |
| 止血成分 | 塩酸ナフゾリン | 0.05%プリ ピナ液(チ バ)、塩酸塩 なく硝酸塩 | 血管平滑筋 のα-アドレ ナリン受容体 に直接作用し て血管を収縮 させる。 アドレナリン より強い末梢 血管収縮作 用を有し、作 用持続時間も 長い(ウサギ 耳殻血管)。 | MAO阻害薬 (急激な血圧 上昇) | | ・頻度不明 (眠気等の鎮 静作用(特に 小児)、神経 過敏、頭痛、 めまい、不眠 症、血圧上 昇、悪心、嘔 吐、熱感、刺 激痛、乾燥 感、嗅覚消 失、反応性充 血、長期投与 で顆粒球減少 ・反応性の 低下) | 頻度不明(過 敏症) | 本剤の成分に対し 過敏症の既往歴 ・2歳未満の乳・幼 児(ショック) MAO阻害剤の投 与を受けている (急激な血圧上昇) | 冠動脈疾患、高血 圧症、甲状腺機能 亢進症、糖尿病、 交感神経作用薬に よる不眠、めまいな どの既往、妊婦又は 妊娠している可 能性のある婦人、 小児 | 適用又は頻回 使用により反 応性の低下 や局所粘膜 の二次充 血を起こすこ とあるので、 急性充血期 に限って使 用するか又は 適切な休薬 期間において 使用すること。 | 眼科用として使 用しないこと。 過量投与により、 主な全身作用と して、血圧上昇と 二次作用として 臓器虚血がみら れる。 幼・小児では過 量投与により、顕 著な鎮静があら われ、発汗、徐 脈、昏睡等の全 身症状があらわ れやすい。適用 ・頻回投与により 顆粒球減少、反 応性の低下、局 所粘膜の二次充 血を起こすこと がある。 | 通常、成人鼻腔内には、1 回2～4滴を1日数回、咽 頭・喉頭には1回1～2mL を1日数回塗布又は噴霧 する。なお、年齢、症状に より適宜増減する。 局所麻酔剤への添加に は、局所麻酔剤1mLあた り0.05%液2～4滴の割合 で添加する。 | 上気道の諸疾 患の充血・うっ 血 上気道粘膜の 表面麻酔時に おける局所麻 酔剤の効力持 続時間の延長 | | |
| | d-塩酸メチルエフェドリン | アドレナリン 作用性の気 管支拡張作 用と中枢性鎮 咳作用を示 す。 | カテコールア ミン製剤(不整 脈、場合によ っては心停止 を起こす) | MAO阻害剤・甲状腺製剤(作 用が増強)、キサンチン誘導 体・ステロイド剤・利尿剤(血 清カリウム値が低下) | β2刺激剤に より重篤な血 清カリウム値 の低下 | 頻度不明(熱 感)、0.1～ 5%未満(心 悸亢進、顔面 蒼白等、頭 痛、不眠、め まい、眠気、 神経過敏、疲 労等、悪心、 食欲不振、腹 部膨満感等、 口渇) | 頻度不明(過 敏症)、 | カテコールアミン 製剤を投与中(不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれ) | 甲状腺機能亢進 症、高血圧症、心 疾患、糖尿病、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人、授乳 中の婦人、小児 等、重症喘息(血清 カリウム低下) | 過度に使用を続 けた場合、不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれがある | d-塩酸メチルエフェドリン として、通常成人1回25～ 50mgを1日3回経口投与す る。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。 | 下気疾患に伴 う咳嗽 気管支喘息、 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、肺 結核、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル) 鼻麻疹、湿疹 | | | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
|---------------|----------------|------------------|---|------|--------------|------------------|-------------------------|------------------|-----------|---------------------------------------|--|-----------------|---|---------------------------------|--------------------|--|--|------------------------------|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| | 酸化亜鉛 | 酸化亜鉛「エビス」 | 皮膚のたん白質と結合して被膜を形成し、取れん。消炎、保護並びに緩和な防腐作用を現す。また、浸出液の吸収及び分泌抑制により、創面又は潰瘍面などを乾燥させる。 | | | | 頻度不明(発疹、刺激感) | 頻度不明(過敏症) | | | ・本剤に対し過敏症の既往歴のある患者 ・重度または広範囲の熱傷・患部が湿潤している場所(組織修復を遅延) ・患部が湿潤している場所(組織修復を遅延) | | | 眼には使用しないこと。吸入しない。 | | | 外用散剤(散布剤)として1.5~100%、軟膏剤・液剤(懸濁剤・リメント剤・ローション剤等)として2~60% 上記濃度に調製し、いずれも症状に応じ1日1~数回患部に適用する。 | 効能・効果軽度の皮膚病変の取れん・消炎・保護・緩和な防腐 |
| 抗菌成分 | イソプロピルメチルフェノール | フェノール 歯科用ではない | 本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。 | | | | | 頻度不明(過敏症) | | ・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現) | | | 原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。眼に入らないように注意すること。・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。・炎症または刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用すること。・外用にのみ使用すること。・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。]・眼を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。 | 長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。) | | 効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒・フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒 フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒・フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍) | | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | 用法用量 | 効能効果 | |
|---------------|------------|------------------------------|---|-------------|------------------|--------------|-------------------------|-----------------------------|-----------------------------|---------------------------------------|--|----------------------------------|-----------------------------|-----------------|--|--|--------------------|--|------|---|---|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 |
| | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | | 使用量(上限があるもの) | 過量使用・誤使用のおそれ | | 長期使用による健康被害のおそれ | | | | | | | |
| 抗菌成分 | 塩酸グルコヘキシジン | 5%ピピテン液、グルコン酸塩を使用 | 抗菌作用：グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。グラム陰性菌には比較的 low 濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類より抗菌力は弱い。ウイルスに対する効力は確定していない。作用機序は十分には解明されていないが、比較的 low 濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。 | | | ショック(0.1%未満) | 0.1%未満(過敏症) | | | | グルコヘキシジン製剤に対し過敏症の既往歴 脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(難聴、神経障害) 腫、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状) 眼 産婦人科用(膣・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等) | 薬物過敏症の既往歴 喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴 | | | | 外用にのみ使用する 眼に入らないよう注意する。産婦人科用(膣・外陰部)、泌尿器科(膀胱・外性器)には使用しないこと。創傷部位には使用する希釈液は調製後滅菌する。本剤は必ず希釈し温度に注意して使用 | | | | ①0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ④0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上) ⑤0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) | 本品は下記の濃度(グルコヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 ③皮膚の創傷部位の消毒 ④医療用具の消毒 ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 |
| | セトリミド | なし | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 創傷治癒促進成分 | アラントイン | なし | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 |
|----------------------------|---------------|----------------|---|------|-----------------|--------------------------|---|--------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|----------------------------|---|-----------------|------------------|--|--------------------------------|--|--|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | | |
| | | | 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | | |
| 血 行 改 善 成 分 | 酢酸トコフェ ロール | ビタミンE:ユ ベラ錠 | 微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。 抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 の失調を是 正する。 | | | | 0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢) | 0.1%未満 (過敏症) | | | | | | | 末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 果がないの に月余にわ たつて湿然と 使用すべき ではない。 | | 錠 剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 | 1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、血栓性静 脈炎、糖尿病 性網膜症、凍 瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止 |